ナーサリー中野の森（社会福祉法人翼友会）中野区

■ 基本情報

所在地	東京都中野区中央2-52-15
運営主体／種類	社会福祉法人翼友会／認可保育所
施設規模	●0歳児～5歳児：70人
特色・理念・目標など	【保育目標】 ①明るく素直で元気な子供 ②笑顔で挨拶のできる子供 ③友だちや仲間を大切にし、思いやる子供 【保育園の特色・力を入れていること】 ■ 様々な経験・体験を通し、それぞれの得意・好きを見つけられるお手伝い
園の周辺環境	●東京メトロ中野坂上駅から徒歩約8分、都心の住宅街の中に立地する保育園 ●近隣公園のほか少し足を伸ばしたところに、遊具と芝生広場が整備された公園がある。
実施クラス	3・4・5歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

開園2年目の園で、「子供主体の保育を学びたい」と応募したとのこと。子供の主体性を大切にする保育を本園に合った形で、模索していくことを伝えた。担任からは、散歩の活動は行き当たりばったりになってしまうことがあることや、子供たちが固定遊具がない場所は嫌がるとの話があった。自然環境の中で遊びのきっかけ作りやアイディアを一緒に考え、伝えていくこと、そこから子供主体の保育の検討につなげていくことを確認した。

■ 事前視察の様子

保育者は子供に問いかけるような言葉かけを意識している様子だった。この日の活動は、サーキット遊びとボールを使ったゲームで、サーキット遊びでは、保育者が用意したトンネルやフープで楽しそうに参加していた。フープが外れてしまったり、トンネルで行列ができたりしていたが、子供同士でフープを支えたり、子供たちだけでもトンネル前できちんと並び、穏やかな子供同士の関わりが見られた。保育者は、3歳児が多い異年齢の保育に加え、こだわりがある子供たちが数人いるとのことで、活動を進めることに苦労しているようだった。

活動同行1回目

2023年10月23日 9:45-11:15［紅葉山公園］

散歩の出発時や道中で止まってしまう子や、機嫌が悪くなり先頭の保育者に抱っこしてもらう子がいた。保育者はそれぞれ1対1で対応し、寄り添っていた。子供に寄り添うことは大切であるが1人の子供に注目し過ぎず、保育者同士が声をかけ連携し合いながら全体へ目を配り、安全に散歩ができるようにすることも大切である。

保育者と色おに、子供同士でごっこ遊びをしながらの追いかけっこ、保育者と子供の追いかけっこと、同じ空間で3つのグループが別々に鬼ごっこをしていた。それぞれの想いを尊重しながらも、遊びがつながり合うように保育者が関わることで、子供同士の関わりと遊びの広がりが生まれるだろう。

蝶々を追いかけ捕まえようとしたり、木の実を拾ったり、木の割れ目の中を覗き込んだりし、自然物に関心を持つ子がいた。また、地面にあいたセミの穴を見つけた子は、保育者に知らせて一緒に観察していた。

保育者の感想

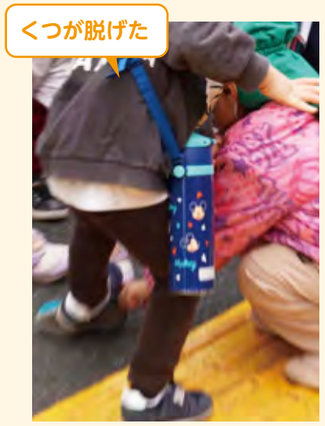
- ●久しぶりに少し遠い公園に足を伸ばした。まずはケガが無いように連れて行くことを心がけた。
- ●感情に浮き沈みのある子が、公園に向かう途中で止まってしまった。運動会を終えたばかりで、疲れなどもあり感情のコントロールがうまくできなかったと思う。
- ●一人一人の個性を尊重し、自由に遊ばせることを心がけた。
- ●5歳児の後ろを3歳児がついて歩いている姿があり、意外な子同士が相性の良いことに気付かされた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●「子供次第の保育」になっていることが振り返りで見えてきた。「子供主体の保育」との違いを検討した。子供の姿や声を大切にしながら、保育者が意図を持って子供たちと関わること。さらに保育者間で声をかけ合い連携して保育を進めることで、保育者に余裕が生まれ、より子供たちの姿を捉えることができる。
- ●異年齢児間の関わりが見られ、子供たちそれぞれが嬉しそうにしていた。保育者が間に入り、お互いの思いを代弁する等の関わりも見られた。子供同士のつながりが増えることで、遊びが発展したり、日常の生活でも異年齢児間の関わりが生まれていく。異年齢児が合同で過ごすことの良さやそのときの子供の姿を振り返った。

活動同行2回目

2023年12月11日 9:40-11:15［中野区立本二東郷やすらぎ公園］



横断歩道を渡る直前、靴が脱げる子供がいた。その子を急かして渡ろうとする姿があったが、そういう時こそ保育者は落ち着いて対応することが大切。予期せぬ出来事にも、子供の気持ちや動きに合わせて安全第一に対応することが求められる。

保育者の「集まるよー」という声を聞いて、スムーズに集まる子供たち。普段は笛を使って集めているが、今回は笛を使わずに、帰りの声かけをしてみた。声かけのみで5分程度で全員が集まって来たため、引き続き、自然な促しを意識して工夫していってほしい。

イチョウの葉を集めてバラの花のように束ねたり、友達に向かって楽しそうに投げ合う子供たちがいた。また、木の実や卵の殻を見つけて観察したり、石段から跳び下りる子供たちもいた。子供たちは自ら遊びを見つけ、それに保育者が遊びのアイデアを伝えたことで遊びが広がっていた。

保育者の感想

- 急な保育士の欠勤があり、体制を十分に整えられず、気持ちの余裕がなかった。
- 公園に向かう途中、車通りが多く、思ったよりも時間がかかり焦ってしまった。
- いつものように芝生広場で遊ばせようと思ったが、イチョウの葉に子供たちが関心を示したので、自由に遊ばせた。
- 気持ちが切り替わらず、帰ることを嫌がる子がいる。気持ちを切り替えさせる声かけを試行錯誤している。

アドバイザーからの振り返りのポイント

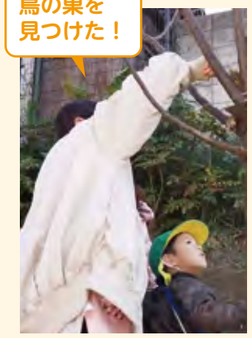
- いつもとは違う人員配置で保育者自身が落ち着かなかったようだった。そういう日こそ、子供たちが安心安全に過ごせるように、その日の状況に合わせて柔軟に保育計画を変更し、保育者の心の余裕を保つことも大切である。
- 散歩中や固定遊具の安全管理では、子供の行動の予測・把握・対応が大切である。保育者間で声をかけ合い連携し、その日のリーダーを中心に全体を把握しながら進めていってほしい。
- 子供たちは自然物と関わりながら自ら遊びを見つけていた。保育者も子供たちと楽しみながら過ごすことで、子供たちのつぶやきに気づいたり、心のつながりが感じられ、より子供の姿を捉えられるようになるだろう。その子供の姿から保育の面白さを感じられるようになってほしい。

活動同行3回目

2024年1月15日 9:50-11:30［中野区立本二東郷やすらぎ公園］

保育者が用意した“お土産バッグ”に大きな石・木の実・枝などの自然物を拾い集める子供たち。なかなか見つけない子や小石を拾う子のほか、大きな石を見つけて「恐竜の卵だ」と想像を広げる子もいて、他の子が集まる場面もあった。子供たちの自発的な活動となった。

石垣によじ登るチャレンジが始まった。自分だけの力で登り切る子、登っている途中でずり落ちそうになる子など、力は様々。保育者は石垣の下から見守ったり、子供の成長発達に応じて背面を支えるなどの対応が必要。また、一度に大勢が登り、危険を感じる場合は、登る場所や人数を限定することも安全管理の一つ。



帰る時間に、鳥の巣を見つけて保育者に見せる子供がいた。もう並んでいた子供たちも鳥の巣を見たがり、リーダー保育者は「みんなで行っちゃおうか！」と決めて、全員で見に行った。計画がありながらも、子どもの“今”の姿を尊重する保育者の姿があった。このように子供たちの声を拾える心と時間の余白があることが大切。

保育者の感想

- 公園にはほかの園児も多く、遊べる場所が制限されてしまったが、岩登りをしたり、子供たちは考えて遊んでいると感じた。
- 拾ったものを持ち帰る楽しみを子供たちに知って欲しいと思っていたが、大きな石や、長い木の枝など予想しないものを拾ってくるのが面白かった。
- 恐竜の卵や隕石に見立てて友達に見せたり、いろんな遊び方をする発想力に気づかされた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供と保育者が落ち着いていた。保育者が楽しむことを意識し、保育の意図や保育者間の連携を心がけていたとのこと。このことから、保育者の心のゆとりが生まれ、子供と共に楽しみながら活動ができていた。保育者の在り方が保育に大きく影響すると感じた。
- 帰る時の集合時、今回も笛を使わずに子ども達に伝えていた。笛は本当に危険な場面に使用するにとどめ、引き続きこの形での集合を継続してほしい。
- 子供の発想を面白がりながら、子供を信じて待ち、子供に任せる保育へと変容していってほしい。それにより、さらに子供との信頼関係が深まり、その信頼関係のもとで保育を行えるようになる。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

散歩の出発時や道中で歩きたくなくなる子供たちに保育者が寄り添って対応。公園では3グループで別々に鬼ごっこが始まった。茂みの中でのごっこ遊びや蝶々を追う子供たちの姿には、異年齢児の関わりの良さも見られた。

子供を尊重しすぎる保育に課題が見えた活動

同行2回目

子供たちが固定遊具だけでなく、自然環境に関わりながら自ら遊びを見つけていた。子供たちの様々な発見を保育者も共に楽しむことで、子供たちのつぶやきに気づいたり、心の動きを感じ、子供の姿をより捉えることができる。

イチョウの落ち葉に吸い寄せられた活動

同行3回目

“お土産バッグ”に子供たちが思い思いの自然物を入れる。大きな石や枝などを入れる子も。大人の予想を超えた物を拾う子供の姿に驚く保育者の姿があった。保育者が楽しんでいる姿に子供たちの興味関心が深まった。

子供自ら自然を見つけ遊びが広がった活動

保育者の振り返りコメント

担任Nさん：

- 保育同行に対して、初めは緊張があり、楽しむより不安の気持ちの方が大きかった。最終日は気持ちをフラットにして「この活動を子供達としたい」「楽しんで保育をしよう」と考えたことで、楽しんで余裕を持って保育をすることが出来た。また活動予定の変更があっても「まぁ、いっか」と余裕を持って行動できた。
- 初めは、子供に引っ張られて（子ども次第になって）活動することが多かった。振り返りを通して、目的を持って活動することの大切さを感じた。楽しむことが出来た。
- 「子供主体ってなんだろう?」と難しく考えていた。
- 活動の振り返りを重ねていくことで、次の保育に活かされてきたのではないかと思う。

園長Oさん：

- 事業前は「子供主体の保育」を「自由な保育である」と理解していた。しかし、導入研修の中で「ルール（枠）があってこその子供主体の保育である」と理解し、「深く難しく考えなくていいんだな」「自分の保育の中でどう取り組んでいくかを考えていこう」という気持ちになった。
- 子供達の興味が、既存の遊具から自然物へと変化していった。
- この事業を通して、職員たちが「楽しむ」「”こうしなければいけない“ということはない」という意識を持ってもらえたら良いと思っていた。子供達の変化から、職員たちの保育の選択肢が増えたり、「こうしなければいけない」ではなく、「こうしたい。次こうしよう」などの意識の変化があった。

アドバイザーまとめ

担当：久保田修平

活動の特徴と意図

- 「子供主体」の保育と「子供次第」の保育の違いを考え、意図を持って活動を行うこと
- 保育者の緊張や不安が和らぎ、保育者自身も楽しんで主体的に保育を行おうとすること
- 子供たちがその場にある自然物へと関心を寄せる姿が増えること
- 保育者同士がより声をかけ合い、頼り合うことで、保育の中で保育者間の連携が見られるようになること

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 初めは、子供を尊重しようするあまり、子供主体の保育ではなく子供次第の保育になっていたが、保育同行や振り返りを通して、保育のねらいや意図を持つことも大切であると気づいた。それにより、保育者が落ち着き、子供も落ち着いて活動する姿が増えていった。
- 保育者自身が「保育を楽しもう」という気持ちを持つことで、緊張や不安が和らぎ、余裕をもって保育をする姿へと変化していった。
- 子供の姿に合わせ、柔軟に計画を変更させていこうという気持ちが生まれた。
- 子供たちがより自然物への関心を深め、五感で楽しもうとする姿が増えた。また、自発的な遊びが増え、遊び込む姿も増えていった。
- 保育者が子供の発想力や遊びを見つける力に気づいた。子供を見守ることへ意識が向いてきた。

アドバイザーの振り返り

活動同行最終日に子供たちと保育者たちの雰囲気が変化し落ち着いていたことが、非常に印象的でした。それは本事業を通して「自分たちの保育」や「子供たちの姿」を振り返り、保育者自身が意欲的に省察・計画をしたからと考えています。初めは、子供に振り回されてしまう場面がありましたが、「子供次第と子供主体の違い」を確認し、保育の意図を持つことを意識していったようです。そのことから、保育者の在り方が変化し、子供にも影響していったのだと思います。

また、振り返りで、保育者から「今日は楽しかった」という発言がありました。保育前から「今日は楽しもう」と心掛けたことで、子供を尊重することにつながり、子供もよりのびのびと自発的に楽しんでいるように見えました。保育者が心のゆとりを持ち、楽しんで保育することは大切です。

全体を通じ、改めて保育者の在り方が子供に影響し、循環していくのだということを実感しました。子供とともに保育者も主体性を持ち、柔軟で、楽しく、面白く、幸せを感じる保育をしてほしいと願っています。

そして今後も引き続き、子供たちの姿や声を捉え、保育計画へとつなげていってください。そのためには、日頃から振り返りを行い、保育者間での連携・助け合い・頼り合いを深めていってほしいと思っています。それらを通して、子供主体の保育を基軸とした自分たちの保育を作っていくことに期待しています。

木曽保育園（社会福祉法人蘭会）町田市

■ 基本情報

所在地	東京都町田市木曽東4-13-7
運営主体／種類	社会福祉法人蘭会／認可保育所
施設規模	●0歳児：6人　●1歳児：14人　●2歳児：15人 ●3歳児：15人　●4歳児：15人　●5歳児：15人
特色・理念・目標など	【保育理念】 意欲と思いやりのある子供の育成 【保育園の特色・力を入れていること】 園庭改造を計画中。園庭も広く子供達は伸び伸びと遊びを見つけて楽しんでいる。また、子供達の「やりたい」という気持ちを大切に日々保育をしている。
園の周辺環境	●園の周囲に住宅団地と共に里山の風景が広がり、緑豊かな公園が点在する自然あふれる環境。
実施クラス	3・4歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

創立50年以上という長年積み重ねてきた保育に「子供主体の保育」を取り入れようとしている姿勢が見られた。保育者が個々で外部研修に参加しているが、「子供主体の保育」に関して、保育者それぞれの解釈に相違があるようだった。また「一斉保育」か「子供主体」か、どちらか択一になっているようだったため、本園ならではの子供主体の保育を模索できると良いと感じた。

■ 事前視察の様子

園庭にて自由遊びをしており、三輪車、砂場などで遊んでいる子が多かった。園庭の大きなセンダンの木にはたくさんの実がなっており、子供たちはその実を採ろうと飛び跳ねたり、スコップで採ろうと試行錯誤していた。その他にも、三輪車と小さなワゴンをつなげて3人で乗ったり、砂場の横で用意された水が入ったタライで砂場の道具を洗ったり、砂場で料理作りのような遊びをしたりするなど、子供たちの自由な発想が遊びの中で多く見られた。穏やかにゆったり過ごしている印象であった。

活動同行1回目

2023年10月4日 10:05-11:05［森林公園］

一人で範囲を示していた

公園に到着し、リーダーとなる保育者が、遊ぶ場所の範囲を実際に移動して伝えていた。その保育者だけが子供から見えづらいところまで遠ざかったため、待ちきれない子供たちが、保育者の後を一斉に追いかける場面があった。

どんぐり拾いをして遊んだ。色や形、大きさ、数、割れているもの、皮むき等、子供たちは色々なところに注目し楽しんでいた。また、バッタを見つけたり木のウロ（木の幹の穴）に棒を入れかき混ぜてみたり、どんぐり以外にも遊びを見つけている子供たちだった。

みて！どんぐり！

探検しよう！

子供たちと同じくらい保育者もどんぐりを拾い、夢中になる姿が見られた。その楽しそうな様子に、子供たちは惹かれ、保育者の周りに集まり、遊びを共有した。子供の声から、保育者がペンを出してどんぐりに顔を描いていた。

一緒に楽しむ保育者

生垣に入り込み、迷路のように探険したり、秘密基地にして遊ぶ姿があった。保育者を呼んで、生垣の中を得意気に案内する子供もいた。その様子に保育者は、子供たちは自然の中でもいっぱい遊べるのだと感じたと話していた。

保育者の感想

- ●公園に着くと、遊んでいい場所を伝えている最中にも関わらず子供たちが待ちきれんばかりの勢いで散らばってしまい、誰かがいなくなるのではないかと不安になった。
- ●子供がどんぐり拾いに夢中になっている姿に、自分も引き込まれてどんぐり拾いに夢中になった。
- ●1日の保育の振り返りができておらず、環境をどうやって作っていくか、全体で考える必要性を感じたが、結局、忙しく振返り時間を持つことができていない。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●リーダーが一人で遊ぶ場所の範囲を説明するのではなく、他の保育者と連携することで、よりわかりやすく、安全に子供たちに伝えることができる。そのため、事前のちょっとした打ち合わせや、その日の活動やその時々の意図を共有することが大切。
- ●今回は「どんぐりを探しにいくよ」と伝えたが、どんぐりがあることを伝えずに出かけることで、自ら見つけるという体験ができる。そのことで、見つけたものへの関心がより高まり、好奇心や探求心を育む機会となるのではないか。また、子供が拾ったどんぐりを製作など様々な活動につなげることで、保育につながりを持つことができる。

活動同行2回目

2023年11月28日 9:30-11:35［町田市立忠生公園内の歩道脇の一角］

蜘蛛の巣を見つけた子供が、葉っぱを投げてひっかけ、蜘蛛を落とそうとしていた。落とした蜘蛛を葉っぱに乗せて運び、保育者に見せて回る子がいた。その後、他の子がその蜘蛛を潰してしまったが、死んでしまっても葉っぱに乗せて持ち歩く姿が見られた。

棒で木を叩いて、朽ちた木が壊れるのを楽しんだり、立ち木に打ちつけたりして遊んでいる子が多くいた。危ない場面は見られなかったが、保育者それぞれが子供の棒の扱いに悩みながら見守っていたことが振り返りで分かった。

本来であればただ通り過ぎるような場所で、子供たちの興味が広がり、遊びが始まった。花を摘み、どんぐりを拾うなど「静」の遊びと、斜面の上り下りや段差からのジャンプなどの「動」の遊びなど、様々な遊びを生み出していた。子供たちの気持ちの高ぶりが姿に表れ、その気持ちに寄り添い見守る保育者の姿があった。

保育者の感想

- 自然の中にあるもの全てが遊びの素材であると、子供の遊ぶ姿から気がついた。
- 横断歩道では、子供の前で防いだつもりだったが、道路側ではなくて反対側に立ってしまう場面があった。
- 木をたたく遊びで樹の皮が剥がれたりしてるのを見て、子供が見つけた遊びなので見守るべきか、公共の場の生きている木なので制止すべきか迷った。
- 起伏があり、木があり、水が流れ、公園の環境全てが子供のおもちゃになり、何にも声をかけなくても自由に遊んでいたので、自分たちも一緒に楽しめた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 蜘蛛を介して様々なエピソードが生まれていたが、多数の保育者の断片的な気づきが振り返りでつながり、ストーリーとなって理解を深めるとともに、子供の心情の変化など、一人では見られなかった姿を捉えることができた。振り返りの大切さを再認識することとなった。
- 棒の扱いについて対応を悩んでいたが、例えば、叩いて衝撃を感じ、その大きさで自分の力を試していたと考えると、対応も変わってくる。単に遊びを制限するのではなく、子供の気持ちを尊重しつつ安全や思いやりにも気づかせるなど、視野を広げられるようにしながら遊びを保障できると良い。
- 子供たちの自発的な遊びや十分に遊び込む姿を見出すのに、自然は最適な環境であることを感じられたのではないかと思う。

活動同行3回目

2024年1月24日 9:20-11:30［町田市立忠生公園内・がにやら池周辺］

「面白いものを見つけたら教えてね」という導入によって、階段が土から木道に変わったことや切り株に大きな蟻を発見したりと、子供たちは様々なものやことに気づいていた。木の幹に苔がついているのを見つけ「緑の木がある」と話した子に応答し、保育者は子供全員に足を止めて注目するよう働きかけていた。

田んぼの水路を覗き込んで、落ち葉が流れる様子や滞留する様子などに気づいて、探究心を持って過ごしていた。落ち葉を水路に流す子、棒を使って落ち葉を突いて動かす子、中には落ち葉を船や魚に見立て、枝を持って「釣りだ」と遊ぶ子がいて、子供たちの個々の視点の違いや遊びの広がりが見られた。

飛び石では、緊張しつつもチャレンジし、一度渡りきると、自信がついてリズムよく渡れるようになっていた子たちがいた。棒を使って飛沫を上げたり、水面の波や波紋の様子を観察したりと水の変化を楽しみ、探求する子が多くいた。枝で深さを探るような姿や、枝そのものが浮くことを発見して喜び、保育者に伝えている姿があった。

保育者の感想

- 事前に下見をしていたが、活動が延期になって季節がずれてしまった。行くということだけが先行してしまい、公園内のどこの場所で遊ぶか曖昧な状態で行ってしまった。
- 水辺のところに着いたら、子供たちが散らばって、まとめることができなくなってしまった。
- 池に落ちる危険性は感じていたが、同行する先生たちや、公園についてよく知っている先生たちと話をする時間が作れず、安全管理に対する連携ができていなかった。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 子供たちは様々なことに気づいている。その一つひとつをできる限り見逃すことなく応答できることが、子供の姿を捉えることにつながる。一人の気づきに全員が注目するよう働きかけたが、それぞれが気づいたり感じたりしている最中ではなく、活動後の子供たちとの振り返り等で取り上げると良い。
- 事前の打ち合わせとは異なり、広範囲での活動になったことで安全管理に不安が見られた。予定どおりにいかないときこそ、疑問があれば声をかけ合って確認するなど、保育者間の連携を徹底することが望ましい。
- 保育者の関わり次第で、より充実した育ちの機会を届けることができる。保育者間で対話しそれぞれの観点を共有しながら、子供たちの体験の機会を増やしていってほしい。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

近隣の公園にてどんぐり拾いや生垣に潜り込んで遊んでいた子供たちと一緒に、保育者も楽しんでいた姿が印象的だった。その中で、保育者間の連携が必要だということも認識した。

保育者も楽しみ自然遊びが広がった活動

同行2回目

遠くの公園への散歩。なんでもない通り道の一角で、様々な自然物を見つけ、遊び込む子供の姿が印象的だった。安全管理や子供の姿の捉え方などにおいて、多角的な視点が大切だと気づいた。

通り道で自然物に気づき遊びが始まった活動

同行3回目

田んぼ周辺で広範囲に活動が広がる。水路の流れや池の深さなどに好奇心を持って遊ぶ子供の姿が印象的だった。しかし、水辺と寒さへの安全管理の面で、下見を活かせなかったこと、保育者間の確認不足等の課題が見えた。

子供の探究心が発揮された活動

保育者の振り返りコメント

Kさん： 振り返りを通して、子供からの問いを大事にしようと思った。子供への問いかけを増やしたら、子供たちからも問いや声が聞こえるようになった。子供たちは、いろんな発見ができるようになり、遊びが上手になってきた。

Aさん： 自然の経験が少ないという印象だったが、自然の中での遊びに慣れてきて、自分で遊びを見つけて遊ぶようになった。以前だったら棒は絶対に持って遊ばせていなかったけれど、ワンクッション待って、見守ることをするようになった。

Tさん： 今回、歩くのが下手と言われたことが突き刺さった。体幹が育たないまま小学校等に行くのは違うと思う。いろんなことを経験させてあげたいけれど、リスク管理の視点に隙間があることが課題。リスク管理には、連携や話し合いが大切ということがわかった。自分が声を挙げていくことも必要と感じた。

O主任： 子供たちの体力がなく、体幹が弱くなっていると改めて気づいた。自然の中で遊ぶことで怪我のリスクは下がるんじゃないかと思った。知っている公園なので、もっと先生たちに突っ込んで聞いたり、地図や写真でどんな環境があるか知らせたりする必要があると感じた。失敗もしたが、経験的にはやってよかった。

N副園長： 参加できたことに感謝。振り返りが大事で、反省するところも成長につながるので、マイナスに捉える必要はない。経験したことを次に生かしてほしい。

N園長： 気づきを活かしていってほしい。当園の保育は今、変わっていっているところ。子供主体の保育がわかりにくい。今回は子供主体を進めるコアメンバーが参加したが、参加していない職員にどう伝えたらいいか、考えていきたい。

アドバイザーまとめ

担当：野村直子／補佐：藤江雅也

活動の特徴と意図

- 「子供主体の保育」のヒントになる関わりを伝えていく
- 園外への散歩を行い、自然の中での子供たちの自発的な姿を保育者と共に捉える
- 保育者間の連携、安全管理の視点や方法を伝えていく
- 一斉に子供たちを動かす保育から、子供の姿を捉え、子供たちに委ねていく保育の検討

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 子供たちが自然物で遊び込むようになった。
- 子供たちの自発的な姿を保育者が気づき、応答的に関わる姿が見られるようになった。
- 外遊びイコール自由遊びという意識から、何を意図して散歩へ行くかを考える機会となった。
- 子供たちに問いかける関わりが増えたことで、子供たちからの発信も増えた。
- 一部の保育者だけで情報共有をしていて、保育者間の連携が取れていなかったことに気づいた。
- 話し合いや振り返りが大切だということに気づき、どのようにその時間を取っていくかという次の課題が見えた。
- 子供の小さなリスクのある遊び（棒を使った遊びなど）を一歩引いて見守れるようになってきた。

アドバイザーの振り返り

長い歴史を持つ保育園ほど、「子供主体の保育」への理解がなかなか進みにくいのではないかと思います。本園も、保育者個々は研修等に出て、理解を深めようとしているけれど、自園ではどのように進めたら良いのか困っているところから始まりました。子供主体の保育の実践には、本園周辺の自然環境を活かすことが足がかりになると考えました。

実際に活動を通して、保育者が子供の姿に驚き、その姿から子供の気持ちや気づきを想像し、振り返りでそれを共有するということを体験できました。そこから気づいて欲しいのは、「子供は大人が気づいていない力を沢山持っている」ということです。

ここからが始まりです。子供たちに託す機会を作り、そこに生まれた余白が、保育者の心の余裕にもつながります。そのことで保育者間の対話や打ち合わせをする余裕が出てくると思います。日々子供の姿を観察し、大人の想定を超えてくる子供を捉え、知れば知るほど安全管理の対応も的確になってくるでしょう。

「一斉保育」から「子供主体」へ移行していく時、「子供主体は自由ということだよね」といって、「子供次第の保育」になりがちです。今回はそこが前面に出てきたために反省の多い活動となりました。今回の経験は、次へのステップと考えています。見えてきた課題を園全体の課題として捉え、保育者みんなで考えていくことをお勧めします。「子供主体」の保育へと変化してきており、今後、園の新しいスタイルを築き上げることができると信じています。

小金井公園ハイジ保育園（株式会社キッズキングダム）小金井市

■ 基本情報

所在地	東京都小金井市関野町2-6-8
運営主体／種類	株式会社キッズキングダム／認可保育所
施設規模	●0歳児：5人　●1歳児：9人　●2歳児：9人 ●3歳児：9人　●4歳児：9人　●5歳児：9人
特色・理念・目標など	【保育理念】 ①子供の最善の利益を優先させる保育を行う ②子供らしい感動や体験を通して生きる力を育む ③地域の人たちが求め、必要とする子育て支援に努める。 【保育園の特色・力を入れていること】 ■ 小金井公園という自然がたくさんある場所で、たくさん遊んでいく。その中で、自然が教えてくれる体験を通して、感性を育て、情緒の安定を図り、丈夫な体を作っていく。 ■ 収穫体験や栽培なども積極的に行っている。
園の周辺環境	●都立小金井公園に隣接し、また周囲には農家が設置する野菜の庭先販売所も多い。
実施クラス	3・4・5歳児クラスを対象に実施

■ 導入研修での様子

職員間の雰囲気が良く、研修もリラックスした雰囲気の中で、各自エピソードを話しながら和やかに進められた。周辺環境が素晴らしく、すぐ近くに小金井公園があるため、よく出かけている様子だった。その他の特徴として、英語やお茶、学びの時間やひらがなに触れる時間を取り入れているとのことであった。研修で触れた自然の中での子供の姿が、当園の園児にも見られるとのことだった。

■ 事前視察の様子

朝の会～英語の時間の約1時間弱、多少後ろを向いたり、他の子にちょっかいを出したりする子供もいるものの、その場から離れる子供はなく、先生方が繰り広げる歌などに楽しそうに参加していた。保育者は子供の注目の集め方や促し方が上手で、自身も楽しそうだった。縦割りであったが、穏やかにまとめられているのが印象的であった。その後の公園での遊びでは、ボール遊びや泥団子づくり、切り株からのジャンプなど様々な遊びをしている姿が見られたが、保育者と一緒に遊ぶ子供が多いように感じた。

活動同行1回目

2023年10月27日 9:30-11:10［都立小金井公園］

「落ち葉アートのための落ち葉拾い」がこの日の目的。保育者にとっては落ち葉拾いは遊びではなく活動で、活動をした後に、遊ぶために梅林へ場所を移動するという計画だった。子供たちに移動を促すが、ほとんどの子供達がその場で遊びが始まっていた。

サラサラの土で山を作っていた年長児が「みずがあればな～」とつぶやいたことをきっかけに、水を使って土の器づくりの遊びが始まった。器ができた瞬間、子供たちの発見と感動が見られた。一緒にいた3歳児の心も動き、見様見真似で作っていた。その後移動した先でも、子供達は器作りに夢中になり、その姿が他の子供たちへ伝染し、遊びが広がっていった。試行錯誤する様子を子供同士でよく見て、学んでいた。3歳児が5歳児をよく見て真似て、自分で作れた時の嬉しそうな顔が印象的であり、縦割りの良さがよく表れていた。また、最初の場所で体験している子としていない子の水の扱い方の違いが見られ、興味深い姿も見られた。

偶発的に生まれた一人の子供の遊びのアイディアが、各年齢の子供たちが自分なりにやってみる姿へとつながり、遊びの広がりが見られた活動だった。子供達の発見や感動をそばにいた大人たちも一緒に体験した出来事だった。この遊びに没頭していた子供達は、水をどう運んでくるか、どの土が良いかなど、子供たち自身で考え試行錯誤を楽しんでいた。

保育者の感想

- ●子供の意見を大事にしようと思い、場所を移動するか子供に聞いてみたが、葉っぱを拾うというテーマを入れたため、遊びのルーティンがいつもとは変わって遊び込めなかったと感じた。その場の子供の様子を見て、臨機応変に判断をすればよかったと思う。
- ●いろんな遊びを子供は考えるが、YouTubeで見たというのが現代っ子らしいが、ただ見るだけじゃなくて、実際に体験するっていうところに、すごい達成感があったのではないかなと思う。
- ●いろいろと好きな遊びを発展させることが、今日はよりできたと感じた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- ●子供達が遊び始めたところで、計画のために別の場所へ移動したことがもったいないと感じた。また場面転換のタイミングも、子供の様子を見計らって声をかけると良い。計画のために子供を動かすのではなく、子供の姿から計画を立て、柔軟に対応するように、保育の視点を転換することが大切である。子供達が自発的に遊ぶ姿を大切にしたい。一斉保育の関わりと子供主体の保育の関わりの違いを踏まえ、「子供達を遊ばせる」のではなく、「子供が自ら遊びを見つけて遊ぶ力がある」と信じ、任せてみることが重要である。
- ●公園などで水がない時に、すぐに手を洗ったりできるようにペットボトルに水を入れて持っていくと良い。今回のように遊びに使うことが想定できるときは、子供達と相談して持っていくかどうか決めても良いのでは？

活動同行2回目

2023年11月30日 9:35-11:20［都立小金井公園］

広場に着くと、落ち葉で“花火大会”（上に投げる遊び）をしたり、大きな落ち葉拾いやボール遊びなどをする子供たち。ボール遊びでは、ボールを一人一つ持ち、蹴っては追いかけたり、5歳児と保育者でサッカーをしたりした。ボールをたくさん持って行ったが、サッカーをしたい子の分だけ持っていく等、ボールを持っていくかを事前に子供と決めてもよかったかもしれない。

保育者が葉っぱお化けになり、子供たちがやっつけるという戦いごっこを行っていた。ボールを「ばくだん」に見立てていた。保育者が子供たちに声をかけてゲーム性のある遊びを提案したり、子供にせがまれて、追いかけっこやごっこ遊びを展開する姿が多く見られた。

1人だけポツンと座っている子供の姿があり、様子を見ていると、4歳児の女の子2人と揉めていた。その後子供同士でなんとなく仲直りし、お家ごっこが始まったが、また他の男の子と揉めている姿があった。一人の子の中に未消化の何かがあることが見てとれた。心が落ち着かず、じっくりと遊びを深めることがなかなかできない様子だった。

保育者の感想

- 帰りの時に、もっと遊びたいという声は聞かれなかったので、時間的には良かったと思うが、なかなか集まらず、走りながら子供を集めようとしてみた。すぐに並ぶ子と、並ばない子がいたので、みんなを飽きさせないよう、ぐるぐる歩きながら集めたが、結局帰るまでに時間かかってしまった。
- 落ち葉遊びをしたい子とボール遊びをしたい子両方のために、広い場所での活動にした。葉っぱを使った遊び方に戸惑う部分があり、遊びのバリエーションを増やしたいと感じた。子供達が落ち葉の中にボールを隠し、温めてかえすという遊びを始めたことに、発想の面白さを感じた。

アドバイザーからの振り返りのポイント

- 保育者を介して遊ぶことが多く、子供の自発的な遊びが始まりにくい様子だった。保育者提案の遊びから、少しずつユニークな発想は生まれていたようだったが、遊びが始まったら、子供同士の遊びになるように、保育者はさりげなく引いていくと良いと感じた。
- 保育者が遊びに入り込みすぎていることで、見落としている子供同士のトラブルや心の動きがあるように見受けられた。
- 保育者が提案する遊びに戦いや競争が多く、子供たちの何気ない言葉にも「勝ち負け」や競争に基づくものが多く気になった。
- 全体的に、「じっくりと取り組む遊び」が始まりにくく、わかりやすく体を動かして遊ぶ姿が多く見られた。保育者の「遊び」の捉え方をもう一度見直してみることを勧めた。

活動同行3回目

2023年12月26日 9:30-11:20［都立小金井公園］

数人の子供たちが長縄や縄跳び用のロープをただ持って走り回っていた。園長が危険を感じ、止めて電車ごっこを提案した。振り返りでもこのことに触れ、道具を使う時の意図や使い方を伝える必要性を話し合うことができた。また「何でもありではない」ということも確認することができた。

3歳児がどんぐり拾いに没頭。どんぐりが割れて中身が入っていないものを見つけると「リスがたべたのかも」「リスっているのかな？」と会話が始まっていた。また子供によっては割れたどんぐりを見つけて、それを剥くことを楽しんでいる子もいた。自然を感じ、発見する子供の姿が多く見られた。

落ち葉や小枝、欅の幹の樹皮などを使って、子供たちの発想でごっこ遊びを展開。3歳児の焚き火ごっこは、以前5歳児が遊んでいたのを真似ていたとのこと。このように5歳児の遊びに憧れて遊びがつながっていく縦割りの良さが見られた。5歳児は2～3人が始めたキングコブラを探す穴掘りから、焼肉屋さんになり、ステーキ屋に…と遊びが変化していった。他の子供たちも少しずつ関わりながら遊ぶ姿が見られた。ここに3～4歳児も巻き込まれていくと、より縦割りの面白さが出てくる。

保育者の感想

- 最後、帰る時に子供たちと集まって振り返りをしようと思い、どうやったら最後にみんなで集まって振り返りができるかを考えていたが、子供たちを集めることが優先になってしまいできなかった。
- リーダーの先生がうまく動けるように、サブとしてトイレやお茶の準備をすませようと思ったが、タイミングを少し間違え、最後に子供達を集めるときにバラバラになる場面があった。
- 葉っぱ遊び、どんぐり拾い、穴掘りなど、子供達がそれぞれに遊びを展開していた。
- 穴掘りからステーキを焼く遊びに変化し、知らないところで知らない展開がされていることに面白さを感じた。

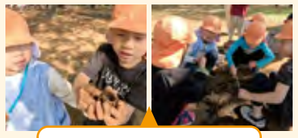
アドバイザーからの振り返りのポイント

- 保育者から遊びの提案や促す声かけが多かった。子供たちは自ら面白い遊びを創り出しており、5歳児の遊びを3歳児が真似たことから遊びが展開されていることが振り返りの中で見えてきた。子供の遊びをより深くプロセスとして観察すると、子供の姿がより見えてくると思った。
- 遊びが学年ごとになっている点が気になった。遊びの中で混ざり合う機会はたくさんあるため、保育者の関わりを工夫してみると良いと感じた。
- 長縄跳びの使い方が危なかった。保育者は「子供たちがしたいことを尊重したいけど、どこまでやらせていいのかが迷っている」とのことだった。“子供主体の保育”を意識しすぎて“子供次第”になりかけていることがわかった。危険を伴う道具を出す時にはある程度使い方を伝え、ねらいを持って出すことが必要である。「何でもありではない」ことを園長と共に伝えた。

活動同行全体を振り返って

同行1回目

二人の年長児から土の器づくりが始まったことから、多くの子供たちがその遊びに没頭し始めた。計画していた活動よりも、子供自ら始めた遊びが、他の子供たちを巻き込み広がった。



子供の発見と試行錯誤が見られた活動

同行2回目

落ち葉拾いやボール遊びに出かけた。保育者が先導し、おばけごっこ・サッカーなど、あちらこちら走り回りながら遊ぶ子供たちの姿が多くみられた。保育者を介したゲーム性のある遊びが多かった。

広場で保育者と一緒に遊ぶ活動

同行3回目

どんぐり拾いのほか、枝や樹皮等の自然物を使って、焚き火ごっこや焼肉屋さんなどの遊びを作り出す子供たち。それぞれがじっくりと遊びを深め、展開する姿が見られた。

自然物での見立て遊びが広がった活動

保育者の振り返りコメント

Wさん：「主体性ってなんだろう」ということを考えた。なんでも自由な訳でもないということがわかったが、どこまで禁止していいのか、ふわふわしてしまった。だから危険な遊び方も見逃してしまった。お散歩に行く場所を今までは保育者が決めていたが、みんなで話し合うようにしたら、年長は子供同士で話し合いをするようになった。行きたい場所を決めている子もいる。以前は保育者に「どこいくの?」と聞いていた。

Iさん：公園で水を使う時に、ペットボトルの水を持っていくのを知り、そういうやり方があるんだ~!と思った。また、子供たちの主体性を大切にしながら、のびのび遊ぶのはどうしたらいいか迷った。どこまでOKにするか?安全も必要だと思っている。以前、なわとびを投げて遊ぶ姿に戸惑った。どうしたらいいのか?

アドバイザーコメント: 安全に関して、自分の違和感を感じたら止めてほしい。安全確保は大切。自分の感覚で止めた上で、後で担任同士で振り返り、「自分はこうしたけど、どう思う?」ということを話し合っていくことが大切。これが“保育の振り返り”。何でもOKではない。時には毅然と伝える必要もある。

H園長：この事業を通して、先生たちの心が揺れ動いて、色んなことを考えたと思う。それが大事で、色々と考えられた先生たちは素敵だと思っている。とても良い機会を頂いた。

アドバイザーコメント:「子供主体」について考えるとわからなくなる。不正解もない。だから、目の前の子供たちの姿を見て、今目の前の子供たちにとっての最善は何か?を考えていってほしい。

アドバイザーまとめ

担当：野村直子

活動の特徴と意図

- 一斉活動と子供が主体的になる活動の関わりの違いとバランスを考える
- 子供たちの自ら遊びを見つけて遊ぶ姿を捉えること
- 「遊ばせる」（計画や提案）より「子供の姿と心の動きを捉える」から保育につなげていくこと
- 縦割り保育ならではの子供の姿や良さに気づく

▶活動を通じて見られた子供たちと保育者の変化

- 「今日はこういう活動にする」という計画を決めて、それができてから自由遊び、という保育の流れから、子供たちの意見を取り入れながら、極力子供がやりたい遊びをさせてあげるという意識がより強くなったように見える。
- 子供たちの発見や気づきを大切にし、自然物を使った遊びに寄り添うようになった
- 3歳児が5歳児の遊びを真似するなどして、よく遊ぶようになった
- 以前は遊びに行く場所を保育者が決めていたが、子供たちと行く場所を相談するようになり、5歳児が行きたい場所を決めるようになった。
- 以前よりも自然遊びを意識して行うようになり、公園を生かした遊びになってきた
- のびのびと遊ぶことを意識し始めたら、どこまでOKにするか迷いが出てきた

アドバイザーの振り返り

この園の特徴として、保育者が前に立ち子供に「楽しく教える」「惹きつける」ということを、非常に上手に行っているという印象です。子供たちも無理なく楽しんで参加しています。だからこそ、視点が180度違う「子供主体」の関わりを理解することに非常に苦労しておりましたが、真摯に取り組んでいる姿勢が素晴らしかったです。毎回、保育者との振り返りの時間は、みんなで学び合う深い時間となりました。

保育者自身も教えたり、「自分が引っ張っていく」ということが得意でそこに面白みを感じている様子だったので、それは大切にしながら、外遊びの時は違う関わりにチャレンジしてみることを目標に置きました。

まずは目の前の子供たちが「今、どんな姿か?」「どんなことに興味を持っているのか」など、そのままを観察することが大切です。その姿から保育を計画したり、柔軟に調整していくことで、だんだんと子供の興味関心、成長のツボが見えてくると考えています。

また、安全管理に関して、保育者が迷いながら、子供の危ない遊び方も許容してしまっている場面が見られました。この迷いは「子供主体の保育」に取り組む中での通る道かもしれません。「子供主体の保育」は「何でもあり」ではありません。子供たちの主体性を大切にした遊びの中で、「どうしたら安全に過ごせるか」「安全な道具の使い方」などを、子供達と対話しながら伝えてみる工夫も必要です。保育者間や子供たちとの話し合いや対話を大切にしながら、その匙加減をつかんでいってほしいと思います。一朝一夕にはいきませんが、目の前の子供の姿と保育を、保育者間で日々振り返りながら、探究していってほしいと思います。